



「第一次大極殿院東楼復原整備工事」

を支える職人の方々の紹介

～左官編～

伝統技能の紹介

左官工事の工程

土荒
作壁
りの

荒壁
塗り

中塗り

木舞
縄搔
き

斑直し

漆喰
上塗り

左官とは

左官とは建物の壁や床等を、鏝(こて)を駆使して作りあげる仕事のことを意味します。左官の歴史は長く、昔から変わらない材料と方法が現代まで受け継がれ、その技術が東楼復原整備工事にも活用されています。

土壁内部

木舞藁縄搔き

漆喰上塗り

荒壁

漆喰仕上がり面(南門の例)

左官工事の工程

土荒
作壁
りの

荒壁塗り

中塗り

木舞藁
縄搔き

斑直し

漆喰
上塗り



東楼では、左官職人たちによって「荒壁」と呼ばれる土壁が作られています。その中で最も重要な「荒壁の土作り」を紹介します。

荒壁土：粘り気のある土に藁(わら)を2週間おきに合計10回に分けて土に混ぜ込み、1年以上の時間をかけて土を発酵させた土

荒壁土に混ぜ込まれた藁が発酵して繊維質に変化することで、土が壁に絡みつき、強度が増して荒壁の割れの防止に役立ちます。

土作りで使われる材料は「水・土・藁」と、今でも(昔から)日本の土地にある材料のみで作られます。

東楼に携わる左官職人たちは、左官にどんな魅力を感じ、どんなことを意識しているのか、また、東楼ならではの苦労や東楼に携われることについてどう感じているのか、取材して参りました。



左官の道に進み1年目の浪川さん。東楼では土の練り回しを担当しています。浪川さんには、左官の魅力や苦勞、東楼に対する思いを語ってもらいました。

昔ながらの方法で作上げる

私が左官の道に進むきっかけは、大学の研究室の活動で蔵の解体と修理の過程を記録したことです。研究室で左官を知り左官の歴史と自然の材料（水・土・藁）により、昔ながらの方法で作上げていく事に魅力を感じて、左官の道に進みました。

原理的・論理的に教えてもらえる

まだ1年目であり、左官に対する経験が浅く日々難しさ感じます。例えば土の材料を作るのにも試行錯誤です。先輩達から土と藁がどう絡んでくるのかといった原理を論理的に教えて頂けるので、積極的に先輩達に聞いて学ぶように心掛けています。直接聞いて学ぶ事は非常に重要ですが、時には先輩達を見て学ぶ事もしています。例えば、作業をしている時の手先などの細かいところに注目するだけでなく、作業全体を見て学んでいます。一連の作業の流れや段取り、現場での立ち回りなどを見て、自分が取り入れられそうなどころから、取り入れています。

東楼復原工事の規模の大きさを実感

東楼では、荒壁（土壁の下地）を作る為の材料となる土を練る作業を担当しています。普段は、長靴を履いて足で土を踏みつけながら練るのですが、東楼のような大規模建築物の場合、準備する土の量が非常に多いため、足で踏みつけながら練るだけでなく、特別に耕運機も使っています。土を練る度に、東楼の規模の大きさを実感します。

南晃工業

なみかわ

しょうた

浪川 翔太さん

経験年数1年





社寺の中でも大きな現場の左官を任せられている10年目の畑中さん。東楼では土の練り回し、左官の塗りを担当しています。畑中さんには、左官の魅力、これまでの苦勞、東楼に対する思いを語ってもらいました。

こて 鏝をみるとその人の癖が分かる

左官工になったきっかけは、職業訓練校の求人での現場見学。機械仕事より手仕事が多いところに惹かれたためです。実際に仕事を始めると、左官道具の鏝にも魅力があることに気が付きました。鏝は明治時代くらいからずっと形が変わっていません。自身も骨董市というフリーマーケットのような場所に古い鏝を探しに行って、他の人が考えられないほど集めました。しかし、自分がずっと使ってきた鏝が最も使いやすい。実際に集めた鏝を使う機会はありませんでした。鏝を見ると使用していた人の癖も読み取ることができ「人それぞれ、道具それぞれ」というところが鏝そして左官の面白いところです。

サポートできる存在を目指す

部下に教えるときに、先輩それぞれが違うことを言うと混乱してしまいますので、教える立場として苦勞しています。私が入ったばかりの時は、荒壁付けから仕上げまでかなりの時間がかかり、綺麗に仕上げることができませんでした。先輩にマンツーマンで教えていただいたことを糧に、荒壁付けから仕上げまでの作業に向き合い、今ではたくさんの仕事を任せてもらっています。そのような経験から、上の人が言ったことに対して後輩はどのように動くのかを見ています。自分が若手の時には、年齢が離れた先輩しかいなかったこともあり身近でサポートできる存在となれるよう心がけています。

後世に残ることがやりがい

現在行っている東楼は国の事業であり、これからも残っていくので失敗できないというプレッシャーを感じることもあります。後世に残ることがやりがいだと感じています。私が過去に仕上げた建物を見に行くと、一見すると綺麗な漆喰仕上げでも「この部分は鏝を当てすぎた」といった視点で次に活かしてきたので、今までの経験を活かしていきたいと思っています。



南晃工業

はたなか

畑中

ともや

智也さん

経験年数10年



二条城、京都御所等これまでたくさんの現場で左官の経験を積んできた30年目の榎本さん。東楼では品質管理を中心に土の練り回し、塗りを担当しています。榎本さんには左官の魅力、これまでの苦勞、東楼に対する思いを語ってもらいました。

喜んでもらえることが魅力

家に鏝があった事が左官の道に進んだきっかけです。当時の私は道具の中で唯一、鏝が「何のために」「どのように」使われるのか全く想像できず、そこから左官に興味を持ちました。それからしばらくして、左官屋の修行に入りました。そこから長年左官をしてきて、綺麗に仕上がったものを見てもらい、喜んでもらえるところがやはり魅力だと思います。喜んでもらうため、綺麗に仕上げるために、どのようにすればよいか、試行錯誤するところに面白さを感じています。

感覚を覚える機会を与える

現在は責任者として若手指導をしている中で、日々多くのことを考えさせられます。丁寧に説明した方が良い職人なのか、少し強く言った方がよい職人なのか性格を考慮しながら、積極的に話しかけています。

左官は感覚で覚えることが多く、力量を見極めて感覚を覚える機会を与えることを大事にしています。例えば、東楼では土と藁を混ぜ、発酵から行う珍しい土作りが行われていますが、実はこの工程が一番重要になるため可能な限り若手に任せるようにしています。よく誤解されるのですが、いくら腕の良い左官職人でも、材料の材質が良くないと丈夫で綺麗に仕上げる事ができません。

責任者としての怖さ

作業が徐々に進むにつれ、完成したものが綺麗で良い仕上がりになっているのかが気になり、「責任者としての怖さ」を感じます。特に東楼の場合では、私達、左官職人が作り上げたものが多くの人目に触れるので、私のような経験年数の長い人が失敗すると、笑われてしまうので、特に怖さを感じます。じゃあ「なんで引き受けたの？」と思われるかも知れませんが、それは「やらないと面白くないから」この言葉に限ります。



南晃工業

えのもと

榎本

ひでき

英樹さん

経験年数30年

復原工事を支える職人達

会社名	フリガナ 氏名
南晃工業	オオクボ タカアキ 大久保 貴昭
南晃工業 (木津工業所)	キヅ シゲオ 木津 恵雄
南晃工業 (木津工業所)	エノモト ヒデキ 榎本 英樹
南晃工業 (木津工業所)	ハタナカ トモヤ 畑中 智也
南晃工業 (木津工業所)	ナミカワ ショウタ 浪川 翔太





「第一次大極殿院東楼復原整備工事」
は多くの職人に支えられて
整備されています。